

日本哲学の展開と「軽蔑された翻訳」

上原麻有子（京都大学教授）

本発表の目的は、近代日本における哲学研究の成長過程を、「翻訳」という観点から検討することにある。Philosophy は西洋から翻訳を通して導入され、当初は言語の問題にも注意が向けられていた。しかし一旦「哲学」という領域が開かれると、その後は哲学者の言語や翻訳への関心は低下したと見てよい。翻訳の哲学的、創造的意義を理解していた三木清は、当時の哲学者の態度を批判的に論じた「軽蔑された翻訳」（1931年）というエッセーを残している。発表ではまず先行研究に従って「翻訳とは哲学的な行為である」ということを説明した上で、哲学の創造性と翻訳の創造性の表裏一体性を主張し、またその角度から日本の哲学の発展、展開を分析してみたい。